

緊急

座談会!

小学校に「英語」がやって来た! One, Two, Three!

“ - Theme - ”
いったい何から手をつけたらいいの?



- Member -



東京学芸大学
教授

粕谷恭子

「小学校の英語の学習活動は、中学校の英語教育の前倒しになってはダメ!」を信念に、研究活動で築き上げた言語習得の理論を現場に分かりやすく指導・助言をしています。この座談会では、現場教員の悩みに共感しながら、移行期のポイントを示唆します。



創価大学教職大学院
准教授

渡辺秀貴

(前東京都狛江市立狛江第三小学校校長)

前年度まで校長を務めていた学校の校内研究では、子どもが主体的に外国語を学ぶために、指導はどうあるべきかを模索していました。元校長として、新学習指導要領の移行期の学校経営という視点から、現場教員の悩みやその改善の方策を共に考えていきます。



東京都福生市立福生第六小学校
主幹教諭(教務)

小島章宏

主幹教諭(教務)として、この移行期に英語教育をどう校内で取り扱っていくか日々奮闘中です。市の施策で数年前から力を入れていることでもあるので、今では本校の先生方もそれほど抵抗感はなく、「何とかなるさ」という雰囲気を取り組んでいます。



東京都羽村市立羽村東小学校
教諭

福田弘

東京都の英語教育推進リーダーとして学んだことをどう現場に還元するかが私のテーマです。模範授業をしたり、授業への助言をしたりしていますが、基本的には他の教科指導と同じように肩の力を抜いて、まず自分が楽しいと思うことが大切だとPRしています。



成果が見える形で 出るような 外国語教育を! — 粕谷恭子

「日本の人たちは、もう少し英語ができたほうがいい。」ということを実現するために、新学習指導要領では、これから小学3年～高校3年までの10年間の外国語教育で、音声を中心に丁寧にやっていこうという流れが示されました。音声面では、より若いほうが獲得できることがはっきりと分かっています。小学校英語が「子どもたちのこの時期にしかない学びや輝き」を逃さず、そして中学校英語の前倒しにならないように、10年かけて、英語の力をしっかりつけさせることができればよいと思います。



「子どもたちのこの時期にしかない輝き」のイメージは、まさにウィーン少年合唱団の「天使の歌声」です。

小学校英語を 中学校英語の前倒しにしない!

【小島】 小学校の先生方は、生徒のときに、文法から入る、いわゆる「中高の英語」を学んでおり、多くの先生は英語が嫌になった経験をもっています。今、国がやろうとしている音声から入る英語を学んでいないので、先生の頭の中は、文法や構文になってしまうのだと思います。それから、先生方が英語の「発音」に絶対的に自信がないという声をよく聞きます。

【福田】 中学校英語の前倒しになってはいけないというのはよく分かります。ただ、小学校で音声に慣れ親しませたことが、実際に中学校にどうつながっているのかを見ると、やはり私たちが受けていたような授業の場合もあれば、コミュニケーション中心の授業もあり、二極化している現状があると思います。そういった中学校へのつながりの部分がすごく難しいと思います。

【渡辺】 粕谷先生のご指摘通り、学校現場の先生

方は、小学校英語が中学校英語の前倒しにならないようにと考えていることはよくわかります。ただ、先生方は自分たちが受けてきた英語教育のイメージしかないで、**目指したい英語の授業イメージをもつことが大切**ですね。

2年間の移行期間の中で、英語の授業イメージを多くの現場の先生方がもてるような取り組みを、学校単位でも考えていく必要があります。

【2020年度までの流れ】

	3・4年	5・6年
2017年度以前	—	外国語活動 35時間
2018年度 2019年度	外国語活動 15時間	外国語活動 50時間
2020年度以降	外国語活動 35時間	外国語 70時間

「読む」「書く
(なぞる・書き
写す)」の指導

評価

先生方が培ってきた教師力は 外国語にも生かせる!

【粕谷】 先生方は、国語や算数、理科、体育などの授業をする際、教科ごとに、「こうしたら子どもたちが分かるようになる」といったことを想像しながら授業をされていると思います。そこにはいつも、「子どもは、どう身につけていくか?」という視点が必要であって、外国語だけそれがなくてよいわけはありません。先生の中には、最初から「英語は無理!」「うまく発音できない!」と思い、「どのように子どもは英語ができるようになるんだろう。」と考えないようにしているように見受けられる方がいらしゃいます。

子どもたちができないことができるようになる過程と、先生方の年齢で、できないことができるようになる過程には共通する部分も多いと思います。**子どもたちと一緒に、「できないことができるようになる!」**というスタンスで外国語の授業づくりに取り組まれてはどうでしょうか。

それに、他教科で培ってきた先生方の教師力は外国語でも生かします。もちろん違いはありますが、他の教科と根は一緒の部分も多いです。

先生方は子どもを見るプロなので、他教科で子どもたちを見取ってきた眼力を外国語でも生かしてほしいと思います。

学校の取り組みの面からいえば、これまでなかった教科なのだから、どの先生でもできないのが当たり前なので、「学校全体で一丸となって取り組んでいきましょう。」という意気込みが大切です。外国語の授業に関しては、**だれもが新米教師です。挑戦してよい雰囲気**を校内でつくれるとよいと思います。よそいきの授業は必要ではなく、「初めはちょっとつまずいておこうよ。」というスタンスがあってもよいのではないのでしょうか。



Q&A

Question

“ 外国語の授業って、
学級全体がどんな雰囲気だと
よいのでしょうか? ”

Answer



「英語はやっぱり、子どもたちが楽しくなければ。」といったお話をよく聞きます。楽しいばかりではもちろんだめですが、辛い、苦しいのもっとだめなので、子どもたちが居心地のよさを感じる程度の、表現は少しおかしかもしれませんが、「めるい」感じがよいと思います。「英語だから」と少し力みがちで、子どもたちに刺激が多すぎ

るのはよくないですね。英語を習っている子だけができるのではなくて、みんなができるという状態が大切です。そのためには、「先生も英語の授業が好きそうだと、子どもたちが感じるような授業になるといい。」と、子どもたちが感じるような授業をしますよ。先生が無理した授業をすると、子どもたちにもその雰囲気は伝わってしまいます。無理せず、できることから始めましょう!

担任は、「発音担当」ではなくて、「使っているところを見せる担当」

【粕谷】小学校のときに聞いた音が、自分が作る音の元になります。世界の人に分かりやすい音声を獲得するということはどう考えても得なので、世界に通じやすい音を聞いておくことは大切です。その音は人間の生の声じゃないとダメということはなく、機械で再生したのも大いに利用できます。

「発音に自信がない。」と多くの先生が言われますが、授業をするときに子どもがよい音さえ聞くことができれば、先生が音源である必要はないわけです。先生の役割は、**子どもがよい音を聞くことができる環境をつくること**なのです。



先生が運動が苦手でも、お手本を見せられればよいのと同じです。

つまり、自分が英語のお手本になろうと思わなければよいのです。ただ、子どもたちには英語を使う経験だけでなく、英語を使っているところを見る経験が必要です。そのために担任が使っているところを見せる必要があります。担任の先生が心を込めて英語で話しかけることで、子どもたちはその経験をすることができます。

だから、45分間ずっと担任の先生が英語を話すのではなくて、デジタル教材や音源を活用して、「発音担当」の部分はまかせましょう。「使っているところを見せる担当」でよいのです。



【福田】今の話に出た、音のことは本当にそう思っています。移行期間で使用される、文部科学省発行の新学習指導要領対応教材「We Can!」や「Let's Try!」でも音源がたくさん用意されており、推進リーダー同士でも「先生が英語を話す必要がないのではないか。」という話をよくします。子どもたちや保護者が、先生は音源をうまく使いこなす役割なのだと思えば、それで文句は言われなと思います。先生が使うのは「生きた言葉」としての別物であって、テキストに書かれたことを復唱するのではないということですね。先生の役割は、英語が教科になることで明確になっていくと思います。

【渡辺】担任自身が授業の中でよい発音をするという役割を担わなくてよいとなると、すごく気が楽になりますね。苦手意識をもたれている先生は多いですからね。よい音を聞かせる環境づくりが担任の役割で、その聞かせ方はデジタル教材もALTも地域の保護者のサポートもあるし、それを使っていけばよいと役割分担を決めてしまうのもいいですね。それと大切なのは、ただただしくても、「大好きな担任の先生や大好きな友達と、お互いに英語を使って伝え合いたい!」という気持ちなのですね。その関係性を再認識することができました。

英語の授業に取り組むポイントはやっぱり「腹をくくる」こと

【粕谷】年配の先生は、英語は若い人のものだと思います、若手の先生に「得意だし、知っているでしょ。」などと言いますが、年配の先生の落ち着いた話される授業の味わいは、尊いものだと感じます。**英語は特別ではないと分かってほしいですね。**

「無理せず、気負い過ぎずに、できることから始めよう!」というスタンスで、腹をくくってしまうことが、取り組みの極意だと感じます。

【小島】自分自身も英語に苦手意識をもっていたが、教務主任として教員の気持ちに共感しながらも、「前向きにみんなでチャレンジしていこう!」という雰囲気づくりを心掛けています。そうすると、「そうですね。」と同調する先生が増えてきて、今では、職場全体の苦手意識も薄まってきています。



英語教育推進リーダーの役割は?

【福田】モデル授業(模範授業)を、自校や依頼された学校でやっています。若手の先生には、英語の活動案を紹介して、これをベースにしてやるとよいとは指導します。しかし、よい英語の授業をやるには、結局は学級経営の部分が大きく関わるので、指導技術よりも学級の雰囲気づくりや子どもとの人間関係が必要で、あとは型にのっていけば、ある程度うまくいくのではないかと考えています。

【粕谷】若手に限らないと思いますが、先生方は、指導案だけ見ても教室の絵(授業のイメージ)が浮かばないので、実際にモデルとなる授業を見れば、子どもの活動の様子や学習の流し方などがずっと分かってもらえますね。学期に一度でも英語教育推進リーダーが巡回してきて、多くの先生方がモデル授業を見る機会がもてると思います。

【渡辺】若手の人材育成のしかたとして、第一は、子どもとの関係性の醸成で、それなしに英語の指導案とか活動案とかを紹介されても、子どものためにはならないし、教員もやりがいを感じないだろうということですね。校内に一人はモデルになる先生がいるとよいですよ。

Q&A

Question

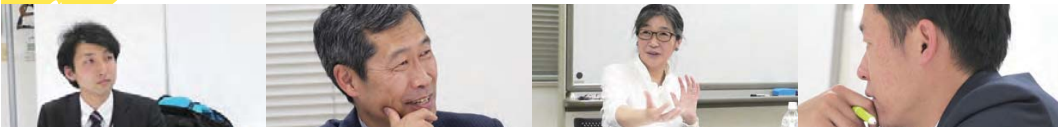
“ 英語に取り組むイメージを、学校(集団組織)でどのように醸成すればよいですか? ”

Answer



やはり、校長をはじめとする管理職が考えていくテーマだと思います。実施すると決められたことが現場の実態と折り合いがつかないときに、どうやって担任の先生たちの意識をその方向に向けていくかは、管理職の役割だからです。各校の先生方の実態に応じて、英語教育のスタートをどうするべきかしっかり伝える必要があります。それを具

体化するために、資料を集めたり、講師や人材を呼んできたりするのが、教務主任や英語教育推進リーダーの役割だということを学校全体として確認するとよいと思います。先生方が無理なくできることから始め、先生同士でお互いを認め合いながら、学校として英語教育に対して少しずつ前に進んでいくイメージを、管理職の声掛けで共有していくことが大切だと思います。



英語は技能教科の面がある!

【粕谷】教科になると、まず「できるようになっていく」ことだけでなく、「定着する」ことも必要になってきます。今までよりもちゃんと英語が話せないといけませんし、鉛筆で行う活動（なぞる、書き写すなど）も求められてきます。そうすると、4つの技能（聞く・話す・読む・書く）というのが、どのようにヒトに（子どもに）身につけていくのかということを理解しておく必要があります。最初に獲得する技能「聞く」は、ただ音だけ聞いていてもそれは音声であって言葉ではないので、意味が伴った音をたくさん聞かせ、子どもの中にためていくことが大切です。

4つの技能を身につけさせる順序としては、

- ① 意味が伴った音を聞いて、意味と音とを結びつけ、ためる。
 - ② 音と文字を結びつけるため、その音が書かれているものを見る。
 - ③ その音が書かれているものを、なぞったり書き写したりする。
- なのだと思っています。

小学校英語では、何よりも①の意味と音の結びつけが大切ですが、その意味が軽視されているきらいがあります。音を暗記して言うことができても、発声しているものの意味が分かっていないという、本末転倒な状況も見られます。

意味のある音を獲得したら初めて、その音の顔（文字）を見せるという流れになります。「書く」のは本当に最後の段階ですね。なので、①「意味と音を結びつけ」てから、②「音と文字を結びつける」ことに、十分な時間をとってほしいと思っています。

そして、③の「書く」のあとに、自分がなぞったり、書き写したものを言わせてみましょう。うまく言えなかったら、まだ音が十分に入っておらず、字を見る経験も不足していたということが確認できます。その場合は、指導案の通りに先へ進んでしまうのではなく、また①に戻ってやり直すことで、子どもの中にしっかりためることができるのです。

子どもたちが英語の技能を獲得していくイメージ

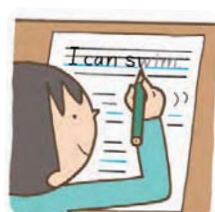
ここを大切にしてほしい



① 意味が伴った音を聞いて、意味と音とを結びつけ、ためる。



② その音が書かれているものを見て分かる。



③ その音が書かれているものを、なぞったり、書き写したりする。



言葉は単語でなく、文脈の中で使うと、授業も子どもも変わる!

【粕谷】新学習指導要領では、「場面・状況」づくりが協調されています。言葉を無機的に訓練するのではなく、文脈の中で使う経験を積むことが大切です。

よく見る授業で、先生がイラストを見せて、その名前を英語で言わせる場面があります。これは、ただその単語が何かを覚える（記憶させる）活動です。これでは意味がありません。子どもの中には文脈があります。ただ、英語を覚えるための活動は先生も子どもも苦しいですね。

例えば、ただ単に色のカードを見て単語を繰り返すのではなく、教室のカーテンを選ぶという文脈の中で、好きな色を伝え合う場面などが考えられます。こうすることで、子どもが色を聞いたり言ったりする必然性が生まれます。子どもたちの普段の様子をよく理解している先生方の力を生かすチャンスです。

文脈の中でその言葉を使えば、ただの言葉ではなく、その背景の情報のやり取りになります。先生にとっては、その子どもの理解にもつながってきます。本当に騙されたと思って、文脈の中で英語を使う授業をやってみてください。本当に違いが分かると思います。

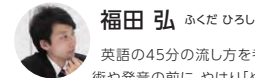
【? 子どもにとって文脈のない、ドリル的活動】



【○ 意味をもたせながら言語を獲得する活動】

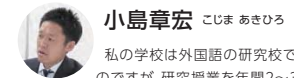


参加先生の座談会よもやま話



福田 弘 ふくだ ひろし

英語の45分の流し方を考えると、指導技術や発音の前に、やはり「めあて」が大事で、ふり返りが、その「めあて」に対してふり返っているかということが1つのポイントになるかと思っています。めあてを立てた上で、目標が英語への慣れ親しみなのか、コミュニケーションなのかを授業者が意識しないと、ずれていってしまいます。意識すると系統的に指導ができてきて、だんだん積み重なっていくと思います。



小島 章宏 こじま あきひろ

私の学校は外国語の研究校ではないのですが、研究授業を年間2~3本行ってきました。校内研修として、来るべきときに教員が身につけておくために始めたもので、数年で、研究授業をやった経験のある先生が校内に増えてきました。研究授業をやると、授業が一人で行えるようになってきて、それが、校内の先生方の授業力を高める源になっています。

粕谷先生からのメッセージ



入試のためではなく、 子どもの人生のために 英語力の獲得を！

最近の英語学習の状況を見ると、入試のための英語力は獲得できても、自分の人生のための英語力が獲得できていない現状があると思います。自分のことや日常のことを、英語で語るができない人が多いということです。

担任の先生方もこれからの英語の授業を通して、使える英語力を取り戻すチャンスだと思います。英語は、上手とか下手とかではなく、言いたいことを言う、伝えたいことを伝える表現なわけで、今ここにいる人たちが使う「生でむしゃむしゃ食べさせるような英語が大事なのだと思います。

「We Can!」や「Let's Try!」に載っている内容について、先生がおっしゃりたい単語を調べて、心を込めて子どもたちに英語でたくさん聞かせて、たくさん話す活動を大切にするとよいですね。

「発音」とセットで 「文法」も大事にして！

小学校での学習を中学校につなげるには、音声とともに文法も意識して指導することが大切です。音に文法は乗ってしまうので、単語を適当に並べるだけで伝わるんだという認識で、子どもたちが中学校へ行ってしまうと、中学校では大混乱になります。単語を並べるだけでなく、「SV(主語+動詞)」や「SVO(主語+動詞+目的語)」の単位で言わせることが大切です。あれもこれも使わないで、例えば、「I like ~.」の学習であれば、「I like blue.」「I like soccer.」というように、「I like ~.」の文の種類だけを繰り返して使うというのがよいと思います。これなら、自信のない先生も取り組みやすいのではないのでしょうか。発音云々よりも、正しい文法で、単語だけでなくセンテンスで使わせておくと、中学校に行った子どもたちが、小学校で覚えたことの約束事をあまり時間をかけないで理解できるようになります。中学校卒業時の到達度を落とさないためにも大切なのです。

粕谷 恭子
かす やきょうこ



Profile

東京学芸大学教授、聖マリア小学校英語科講師。
『みんなあつまれ！はじめての子どもえいご』
『小学生のためのよくわかる英検4級合格ドリル
改訂版』をはじめ、子どもの英語教育に関する
著書多数。NHK「プレキン英語」を監修。